

ホームステイ

なだらかな田園と緑の森。ホームステイ先に向かうまさみとゆかの目に、ドイツ、フランクフルト郊外の小さな町の景色がとびこんできた。

「緑がきれいねえ。まるで絵みたい。わたしのホストファミリーには、イザベラという同じ年の女の子がいるんだって。仲良くできるといいな。」

まさみの言葉にゆかもうなずいた。

二人は、夏休みの交換留學生として、一週間のホームステイのためにフランクフルトにやってきた。まさみの滞在先は、ベッカー夫妻と小学生のイザベラの三人家族である。日本でくらしていたことがあるベッカーさん一家は、日本語が上手だった。

夕食が終わると、イザベラの両親は、楽しい歌を教えてくれた。まさみは、その後イザベラの部屋に行き、ゲームを始めた。二人は、ゲームをしながら、すっかり仲良くなった。イザベラは、

「お父さんとお母さんは、家族の時間を大切にするから、ゲームをする時間が短くなっちゃうの。」

と、ちよつと不満そうだ。ゲームに夢中になっていた二人だったが、そろそ



ろ九時を回ろうとしたとき、イザベラの母親が部屋にやってきて、

「まさみ、イザベラ、二人とももうねる時間ですよ。」

と、声をかけた。

「いいところだったのに。」

と、言いながらも、イザベラは、さっさとゲーム機をかた付け始めた。(ドイツに来てまでうちのお母さんと同じせりふを聞くなんて。) と思ったまさみは、イザベラにささやいた。

「ねえ、もう少しやろうよ。」

すると、イザベラは、首を横にふりながら言った。

「勉強する時間とねる時間は決まっているの。それに決まっ

た時間にねないと、朝起きられないから。」

まさみは、しかたなく自分の部屋に行き、ベッドに入った。

翌日、^{よぐじつ}朝食を終えると、イザベラの父親は、

「ゆかがホストファミリーとうちに来るから、^{いっしょ}一緒にお昼ごはんにしよう。」



と、にこにこしながら言った。

ゆかたちが来ると聞いたまさみは、自分の部屋でなやんだ末、お気に入りのブラウスを身に付けた。

「これ、今日日本で人気のあるブラウスなんだけど、ドイツでもはやっているの。」

まさみをよびに来たイザベラにたずねると、

「えっ、はやっている服……。その人が気に入っているものを着ればいいんじゃない。」

という言葉が返ってきた。

「ふうん。ここでは、はやっていないんだ。」

まさみは、小さな声でつぶやいた。

お昼ごろ、ベツカーさんの家にゆかとそのホストファミリーが到着した。ゆかもまさみとよく似たブラウスを着ていた。



すえ、お気に入りのブラウスを身に付けた。

「さあ、みんな手伝って。」

イザベラの母親の声で、まさみとゆか、イザベラは、昼食の食器をテーブルに並べ始めた。

「二人ともきれいなブラウスね。でも、同じように見えるよ。」

イザベラの言葉にまさみが続けた。

「ドイツでもはやっていっていると思って、やっとのことで買ってもらったんだけどなあ。」

「流行をずいぶん気にしているのね。わたしは、これが一番よ。」

いかにも動きやすそうなかっこのイザベラを見ながら、まさみは、ブラウスをねだったときの母との会話を思い出していた。